

特 116

288

谷川士清先生



始



116  
288



何ゆゑ  
に砕きし身そこ人こはは  
それこ答へん日本玉こひ

大正  
13. 10. 30  
内交

何故爾碎伎志身曾登人間婆其禮登答牟日本玉之譬

## 谷川士清先生

醫人として尊皇の大義を唱へて國體を明かにしたる神道國學の大家

醫學博士 加藤 竹 男 述

大正十一年十一月、我が郷土に於て、谷川士清先生の遺芳を表彰する爲めに、先生の靈前（伊勢國安濃郡新町刑部古世子社跡）に於て紀念祭典を擧ぐべく、星安濃郡長を始め、吾等郷土關係の有志が發起人となつて之れを行ふた。而して嘗て明治四十一年十一月當時の高橋三重縣内務部長、相澤師範學校長の主唱の下に有志の人士によつて計劃され盛大に行はれたる先生事蹟表彰會といふものが残し置きたる基金に更に此度吾々が大方に懇へて募り得んとする基金を併せて、茲に新たに財團法人谷川士清先生遺蹟保存會を設立して一層その基礎を強固にし、更に進んで、吾等郷土有志者あひ携へて新たに神社奉祀のことを企劃し、茲に、吾等先づ谷川神社創建の事を發起したのである。

壽に舉行されたる事蹟表彰會によつて、幸ひにも、先生の遺蹟「反古冢」が修理され、遺品展覽會が開かれ、又、其時の上田文學博士の講演などによつて、世に埋れ居たる先生の業績が世間に紹介され、少からず、世人の耳目に先生の遺徳を追憶せしむるの機會を興へしめられたことは、誠にその當時力を専ら致されたる人士の賜として深く感謝すべきである。これが爲め、後に先生の學德業績は、畏くも天聽に達するを得て、大正四年十一月、國家大典に際して、贈位の恩典に浴せしめられたことは、先生の榮譽は申すまでもなく、先生の靈を慰藉する無上の賜であつた。

然るに、其後、年所を経たる今日まで、吾人が先生の遺徳を仰慕すべき唯一の標徴として、唯「反古冢」の存在せるのみであることは、先生の偉大なる遺蹟に對して、將た又、先生を景慕する人士の誠衷に報ゆるには餘りに微薄なることの概を禁じ得ぬ。

三

斯かる態に、先生の遺蹟の殆んど寒煙荒草の裡に包まれあることの遺憾は、我々郷土有志者の間には常々懷かれながらも、今日までこれを拭ふことの出来なかつたのは、誠に、吾人衷心

慚愧とする所であつた。然るに、今日しも漸く時運を得て、再び茲に埋れんとせる先生の遺蹟を更らに發表すべき機會を得るに至つたのは、誠に喜ばしい極みである。

一体、古人の業績や功徳を彰揚するのは後の世に生れたる人々の義務と言つて宜い。今日の生新なる眼前の文化に眩惑され、そのこれを助成發達することに與りたる先賢の効績を徒らに忘却してはならぬ。眼前の文化の燦然たるものがあればあるほど、これに與りたる先賢の德風を欽仰して益々之を喧傳すべきである。殊に郷土の生みたる先賢の効績は先づその郷土の人士が之を賞揚するに力むべきである。

四

伊勢が生みたる醫人にして、その醫學的の業績を遺したる古名醫は相當數ふるに足つてをる。しかも、醫人と生れて、自ら敬神尊皇の氣風を鼓吹し、國體を闡明して國威の發揚に與り、能く國學の大家とも成りて、其の學說が天下後世に至大なる影響を與へたのは、吾が谷川士清先生と本居宣長大人とであると謂ふべきである。宣長大人の學德が説かるゝに當つては、同時、士清先生の學績を忘れてはならぬ。元來、本居大人も醫を業とし、谷川先生亦醫家で立つた。私は、自分が醫學に關係ある以上、殊更にこの兩大人の德風を景仰して止まないものである。而

も又、谷川先生に至つては、醫家としても吾が郷土の先輩である。同じく醫學にたづさはる吾人が斯の郷土先賢を世に著はすに力むべきは當然である。

#### 五

士清先生は寶永の昔、吾が郷土、伊勢國安濃郡新町に生れた。先生の家は代々土地の醫家であつた。醫者としての士清は、父順端の業をうけて、その従業時代が家運隆昌であつたこと、而して且つ地方に於て流行醫であつたといふことが傳へられて居るなど（巷間傳ふる所による）と狐が先生の診療を乞ひに來たこともあるとさへ言はる、先生の子士逸の學の友、加茂季鷹の筆額を奉じたる稻荷社が、今、反古冢の邊りに祭られてあることは、此間何等かの縁由なしといふことは出來まいか）に徴して凡醫では無かつたことが知られる。先生は稍々長じて京師の官醫福井家に就いて刀圭の學を得たと謂はる。醫學史上から云へば、平安の福井氏は江戸の多紀家にも對する所謂折衷派（考證學派）の大醫と稱されてゐるが、之を以て推すと、先生の學びたる醫方も多分斯流に屬するものだらうと想はれる。折衷派とは所謂後世、古方兩家の偏僻を避けて中庸の醫説を取つたもので、先生の家に藏用されたる處方録といふものを一見しても、仲景や東垣又は丹溪やなどの醫方が註記してあることが容易に肯かれるのである。先生の門流

には醫家が可なりに多く出でてゐる。子士逸、孫士行、亦醫を繼いだ。尙、谷川家處方録に據ると、先生歿後の翌年に家門の者が蘭方學者なる吉雄氏に態々面會して學を尋ねたといふ記事があるが、之れから觀れば、先生にして既に斯學に志ありしやといふことも、和訓栞に先生が自ら採られたる語の中に蠻蘭語が見出されることに想ひ合せて考察さるゝに難くない。尙又、先生が有名な平安の本草學の大家松岡玄達に師事されたことも文籍に載せられて居り、先生亦自ら勾玉、石劍、白石などの石器を掘出されて、今の所謂考古學の研究に夙に力められたことなどは大に敬服に値すると思ふ。

#### 六

士清先生はまた神道家として有名であつた。壯年にして玉木葦齋より神道を授かつた。葦齋は山崎闇齋の創めたる垂加神道を傳へたる人で、士清先生は正に其の流を汲んで居る。垂加は神垂と冥加といへる語に由れるので、延佳の度會神道、惟足の吉田神道より出で、朱子の學に據り、最も、日徳、土金を稱へて、大日靈貴の道、猿田彦神の教といふことを傳へたのである。要は日本紀神代卷、神武卷、中臣禊詞を以て教典としたのであつて。垂加靈社の風水草、五十鱗翁の玉籤集は能くこの神道の奥義を説いてゐる。士清先生の名著の一なる日本書紀通證

も斯かる思想から生れ、先生の精神も之れから導かれ來つたものと想像せられる、先生が垂加神道家として大いに力を致したことは、門生の免許状を受けたものが十數名もあつた事や、先生の家塾森蔭社の藏版として、神代卷藻鹽草、神武卷藻鹽草並に勾玉考などが刊行されて、能く斯の神道を諸生に傳へたことなどが證して居る。先生が尋常一様の醫生でなかつたことは之れにても全く明かである。

士清先生が日本書紀通證の名著によつて神道皇學に造詣の深いこと、又これが殆んど先生の學の精髓となつたことは、上にも述べた如く、既に顯著なことであるが、又、書紀の註釋本として、常に神代紀のみならず、由來神道者流の未だ能く企て及ぼさざりし皇代紀をも詳かに釋き示したことに就いて、これほど秀逸のものは無かつた。この点に於ても、先生が當時の神道者流の群中に自ら拔んで、皇道を更にも照明せんとしたことが窺はれる。この名著は、實に宣長大人の大家、古事記傳にも對比すべきものである。

宣長大人が、當時、學者神道者の手に殆んど閑却され居たる古事記を以て、斯の書最も據るべしとなして、遂に名を千古に留めたるは、大人の達識にあらずして誰れしもよくこれをなすものなき次第であるが、士清先生亦著書の上に、古事記萬葉等の皇典をも涉獵し、國史國語に

精通して、世の神道者輩の謬僻に倣はざりし眞面目なる學風は、後學の敬慕して餘りありといふべきである。

## 七

士清先生の著述の中、又、周知の名篇は倭訓栞である。士清先生の名はこの著によつて更に不朽となつた。倭訓栞は辭書としての體裁を具へたものでしかも範を成したものと謂へる。即ち、從來の字書類や集辭書の型と異つて、雅言古語はいふも更なり、廣く方俗語や邦化したる蠻蘭の言語までをも包容し蒐彙したことは、他に類例が無く、又、辭書として、五十音引を採つたこと、又、訓を同じくする語を同項中に列ね、語を主として字を従としたことなど、之れによつて、言靈の幸はへ助くる我が大御國の奇しき理を明かにしたことは誠にめでたく、凡べて後の辭書なるものに及ぼしたる影響は深且つ大であつた。尙、此書によつて我國の語學が外邦にまでも紹介され得たことこの事實が、新村文學博士の研究によつて、明かにされた。先生の國語學に於ける貢獻や眞に宏大といはねばならぬ。その書の能く皇典儒佛の諸書を引用して、考證の該博精到なる、之れが當時の流行醫や神道家の餘業として成上つたことを考へると、その精力の絶倫なる唯々驚嘆の外はない。

八  
語學者として士清先生は、嘗に考證註訓（なほ鋸屑譚の著あり）の事のみでは無く、倭語通音といふことを述べて、倭語の活用をも示し、今の所謂四段活なるもの、前提を、甚だ粗略ながら、夙に示して、茲にも既に、我が言靈自然の妙を説き得たのは確に卓見といはねばならぬ。尤も、宣長大人の名著詞の玉緒や、「お」「を」所屬の辨や（先生と同じく歌學を有栖川宮の門に承けて語學の造詣深かりし富士谷成章も之れを明らめたが）、春庭の詞の八衢などが直接今日の語法の基礎を固めたもの、兎にも角にも、士清先生が已れ垂加神道にいそしみながら、語學に於て生新なる識見を懷き、所謂古學者と伍してその間自ら一異彩を放ちつゝ、今日の國語學上に齎したる學績は、後進の學者をして永くその恩慶に頼らしむるに足るのである。

八

先生に亦歌集があつたことは、餘り世に知られなかつたが、嘗て、佐々木文學博士の發見から、其の詠集惠露草が現はれ、これによつて、その詠風におのづから學者らしいしつかりしたところあることまでが識らるゝに至つた。先生が京都に上りて有栖川宮職仁親王の門に入つて、堂上風の和歌を詠じ、自然、竹の御園に出入して、公家縉紳の間に、親みのあつたことも、之れによつて明らかで、斯ういふ氛圍氣は、識らず／＼の間に、先生の腦裏に尊皇の胚芽を培養

するを助けたこと、も考へられる。

あふくへし四方の外にもへたてなきこの日の本の國のひかりを

かしこしな民の葉草の末までも君をし仰く大和心は

あふけ猶八島の外ものごかなるけふ九重の春の光を

などの詠草が歌集の中に讀まるゝこと多きにつけても、先生が、その當時にあつて、別けても、皇御惠の忝なさを畏こみ仰ふき、四方の國々までも至らぬ隈なく豊けき皇御國の稜威の光を仰げよかしこのまごゝろを露され、先生が如何に我が皇道の恢宏といふことを常々念慮せられぬたかゞ明かに覗はれて、まことにゆかしいではないか。

九

谷川士清先生の尊皇の大精神は、能くその著書の上に、又、歌詠の中に發揮して、光彩實に陸離たるものがある。即ち、殊に、その書紀通證にその髓腦が包含されて居る。通證第一卷に擧げられたる彙言十九條中に、垂加學者の諸説を引證して、我が神國の天壤無窮の寶祚を稱たへ、赫々たる神明、一本の皇統の照臨しませる皇朝を、相將あひともに護るべく、何人も一つ心に、この皇大御國の永はに鎮りますことを祈るといふなる日本魂を高調して、大義名分を辨

明し、且つ「我が國開闢このかた、上、敵國外患の虞あらず、民、放伐革命の權を知らず、秦然、盤石の宗を固め、宇宙の間に獨立するは、是れ、乃ち、神明の風威にして、誰しも之れを奉崇すべき」ことを自ら揚言して、即ち、我が國統を明かにし、我が國威を發きたる、士清先生の意氣の雄壯熱烈なる、茲に至つて極美を成してゐるのである。

先生が元來、學統として朱子儒學の崎門派の流れを受けながら、その精神に於て、全く儒僻に染まず、又、語學者として悉曇佛學さへも心得ながら、全くこれの思想にも泥まず、純然、皇道を扶翼發揚したことは、上述の氣概を以て既に著明である。加之、下記の一瑣例の上にも、なほその精氣の一端がよく發露されてゐる、即ち、先生の門弟で、同じ伊勢の醫にして國學者なる名島政方の著書晤語の中に、師翁が御國言の四十七字なる「いろは」歌の体を替へて、「あめつちわき、かみさふる、ひのもととなりて」の作歌を以て示されたといふことが載せられてゐる。かゝる間にも、先生の全く梵佛思想から脱したる至純高潔なる古道思想が顯かに活躍してゐるといへやう。又、先生の手記の讀大日本史私記のところ／＼にも、俗儒俗學者の僻見を喝破して餘す所なく、斯くて全く儒風を脱したる潑刺たる皇國精神の閃きが散見され得て、更に尊きを感じしめるのである。尙、士清先生が其の編著を神宮及び神社に献納したる事實や、

其他、神田の由來を審かにし、献米の行事を督勵した様に口傳されてゐることどもも、亦、先生が敬神の念に深かつたことに關してその一斑を示してゐることも見られる。

## 一〇

幕末維新の際に、諸方に起りたる王政興復の思想は、彼の水戸學派や古學勃興の氣運につれて醸成されたる皇道主義派やの力が、之を養成したことは相違は無いが、此の間に、京都を本據として、一派相傳へて、大義名分を高唱し、尊皇氣風を鼓吹して、大なる活動力を以て、天下後世の志士を奮興せしめ、遂に、維新回天の鴻業を助け得たのは、言ふまでも無く、崎門垂加の學派であつた。夫の書紀神代卷を寶曆の天子桃園天皇に進講することの策を上りて、尊皇斥霸の思想を朝臣に説いて、つひに皇權復興の機運の先驅者となつたる竹内式部は、實は、士清先生とは垂加神道の同門であつた。羽倉春滿の國學復古神道を傳へたる眞淵の萬葉祝詞に於ける、宣長の古事記に於ける、これら純粹の國語學研究が生みたる古道主義と、垂加の門流が唯一の神典とし正典としたる漢文體の書紀より得たる神道思想とは、其の出發點こそ變はれ、齊しくわが皇道を辿つて皇風を宣揚したことには於ては何等異なる所は無かつた。換言すれば、斯かる思想に於てこそは、兩派とも極めて相接觸し、互に相喚發したものであつた。水戸學派も



實は崎門派と相提携し、春滿が初めに傳へたる神道とても、垂加の道統によつて端を啓かれたるほどにて、篤胤の如きも、その家門が先きにこの崎門派の感化をも被つてゐた。宣長大人さへも、その學問の由來が垂加を以て恩頼の一に加へ、自ら此の影響をも受け、その外祖に神道者もあつたと言はる。又、士清先生の古典智識は、他方、契沖などにも負ふ所があるとも見られるのである。士清先生の門下から出でたる唐崎赤齋なる祠官が亦著名の勤王憂國の志士となつたことは、垂加神道の流派の感化は云ふまでもないとして、師士清先生の教養の甚大なるに待つべきものあるは蓋し顯著である。先生が夙に宮家に昵近し、躬、幕臣の祿を食むを欲せず、終世一貫斯の心を以て私かに學業にいそしんだ事は、私をして坐ろに愈々快心を禁じ得ざらしむる所である。宣長大人一派の學風が維新鴻業に與つたと同様に、王政復古の回天の大業が、士清先生等の如上の思想より助成され、その皇風の鼓吹よりして振興を盛ならしめたものと私は言ふを憚らない。

## 一一

谷川先生は實に我が伊勢に於ける國學開發の先蹤を成した。學問上に於て、士清先生が宣長大人よりは年輩が長上であつた丈に、宣長大人も士清先生を學兄と敬ひ、先生も亦大人を畏友

として喜び迎へて、相互に著述に關して意見を交換したる事實が甚だ明らかである。國文學者としてまた國學思想家としての宣長は確に大成家であつた。この點に於ては士清先生よりも誰よりも眞に偉大であつた。併しながら、國語學上の見解又は皇道思想の抱負に於て、むしろ先生も確に一つの偉大なる先覺者としての資格は認められねばならぬ。考へ様によつては、書紀通證の編著は古事記傳撰述の先驅ともなり、動機の一つとなつたとも私見されるほどである。又、爲人、宣長大人の溫雅篤厚なのに較べては、士清先生は清廉高節な質であつた様にも想はれるのであり、勤王の氣骨に至つては寧ろ稜々たるものがある。士清先生の安永四年の自詠「何ゆゑに碎きし身を人とははそれと答へん日本王しひ」は、宣長大人の寛政二年の「やまごころ」の名歌と相映發して、我が國粹の結晶であり、我が國體の精華である。「やまごたましひ」の正氣は「やまごころ」の濟美を扶植し得て更に大に力を成してゐる。士清先生の畢生の大精神は「反古家」に留められたるこの歌詠と相俟つて、永しへに世の人士をして感奮せしめ、宣長大人のこの歌詠と共に、萬世に亘つて傳唱すべきものである。

斯ういふ種々の方面から觀て、宣長といふ偉人を我が伊勢に生ませしめたるにつけてもをさ／＼我が伊勢の士清先生の感化に負ふ所無しといふことは出來まいと思ふ。

鈴門多士輩出、其の學風あひ承傳して天下後世を風靡したるに對比して、谷川先生の學流を汲み傳ふるもの甚だ尠く、其の學德世に幽れんとする所あるは遺憾の極みである。門枝の細を以てして師幹の大を蔽ひ隠くすことは出来ぬ。吾人は、齊しく醫人として尊皇の大義を唱道し、國體の精華を闡明したる國學の大家たるこの我が伊勢の兩大人にして、一つは縣社山室山神社として業に已に世人の崇敬を聚めたるほどなるを、懷ふて茲に至れば、先生の遺蹟が、今尙は舊の如く、唯一つの「反古冢」として郷土の間にわづかに標を殘せるに止まるのみなるに満足し居るの慨嘆に堪へ得ない。吾人は之れを大いに世間に愬へて、谷川士清先生の靈を永久に奉祀尊崇すべき「谷川神社」建立の擧の一日も早く實現して、年々祭祀を絶えしめない様、而して先生の遺芳が世に普く傳へらるゝ様惘望する。

加之、進んで、國民が「やまとたましひ」の國風を誦んじて、常に深く先生の遺風を追憶欽仰して、敬神尊皇愛國崇祖の念を培育し、是れに由りて以て世道人心を啓發誘掖して、永しへに國民教化の上に補益する所あらしめむことを吾人は冀望して止まないものである。

(敬神教育資料第二十號掲載文訂補)

大正十三年十月二十三日印刷  
大正十三年十月二十八日發行

【非賣品】

三重縣安濃郡新町大字古河四百五十三番地  
 著 者 加 藤 竹 男  
 發 行 者 谷川士清先生遺蹟保存會  
 三 重 縣 津 市 萬 町 百 六 番 地  
 代 表 者 新 家 元 郎  
 三 重 縣 安 濃 郡 新 町 大 字 古 河 百 八 十 七 番 屋 敷  
 印 刷 者 伊 藤 種 夫  
 三 重 縣 安 濃 郡 新 町 大 字 古 河 四 百 四 十 八 番 地  
 發 行 所 谷川士清先生遺蹟保存會

306  
553

終

